

『病める牛たちの絵』の意味

日本画家の戸田みどりさんは、近いうちに詩画集『病める牛たちの絵』を出版される予定で、福島県の「希望の牧場・フクシマ」へ足しげく通い、放射能障害で病気になった牛の絵をたくさん画いてこられた。すでに国内外で何度も展覧会を開いておられ、カナダでの展覧会も大変好評を博したが、200号の大作も2点完成されて、さらに内容が充実して来た。その画業についてはすでにご紹介してきた¹。また、「希望の牧場・フクシマ」には現在約360頭の病牛があり、牧場主吉澤正巳さんに共感してサポーターになったり、本を出版されたりする人が少なくない²。

1. 生命のシンボル

詩画集を出版するにあたって核になる仕事は、病める牛を大切に飼養することの意味をきちんと説明することだと思ってきた。直感的にはそれは有意義なことだと確信してはいたが、第三者の納得を得る言葉にすることが意外にむずかしかった。以下に、最近感じたヒントを挙げておきたい。

* * * * * * * * *

暮れの30日午後に、たまたま磯田道史の「英雄たちの選択」というテレビ番組を見ていたら、「日本刀」をテーマにしていた。現代にも刀を作り続けている刀鍛冶があり、剣道を学んでいる人たちがいる。テレビに映されていた刀工は現代の名工（人間国宝）の河内國平で、500年間実現できなかった地紋の「乱れ映り」のメカニズムを解明して完全に再現に成功した人である³。

幕末には、日本の危機が認識されて、江戸は一大剣術ブームになり500軒(?)の道場が林立したようだ。その中の3指に入る道場主が神道無念流の斎藤弥九郎で、「刀は抜くな」と教え、当人も一生のうちに一度も刀を抜かなかったという。「殺人剣」に対する「活人剣」という理念が唱導されたようだ。戦国時代には鉄砲が実戦に導入され、江戸時代には実戦ではほとんど使われなかったが、「刀は武士の魂」として尊重されてきた。それどころか、第二次世界大戦まで日本の将校や警官はサーベルを腰に下げ

¹ 「病める牛たちの絵」『筒井新聞』第346号(1) <http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/346/346-1.pdf>

² 針谷勉『原発一揆～警戒区域で闘い続ける“ベコ屋”の記録』サイゾー、2012年
真並恭介『牛と土 福島、3.11 その後。』集英社文庫、2018年

³ 「河内國平と関西大学」関西大学教育講演会、<https://www.kansai-u.ac.jp/pa/ashi/vol164/contents3.html>

るのが正装であった⁴。ヨーロッパでも第一次世界大戦開戦時に、ドイツの将校たちが一斉にサーベルを研ぎに出したと記録されている。

つまり、実用上の意味がなくなってから、より一層武士階級のシンボルとして、あるいはある種の精神性を象徴する美術品としてその存在が輝きを増している。

*** *** ***

「希望の牧場・フクシマ」の話に戻ろう。

牛は屠殺して、食用に供する目的で飼っているのがもともとの意図だが、「命あるものを必要ないのに殺すのは本意ではない。殺す必要がなくなったら生かすのが本道だ」という直感的な判断が牧場主を突き動かしていると思われる。

また、上記のテレビ番組の中に「居合」の先生の実演とインタビューがあったが、「居合は相手を殺さず・傷つけずにその場を収めるのが最上の目的だ」ということばがあった。東北の曲がり屋には、人間と家畜が同じ屋根の下に同居していた。殺す必要が無ければ一緒に生きるのが当たり前だ、という自然な感情が牛飼いたちの中にあると理解すれば、多くの言葉を要しない事実と言えらると思直した。

2. 命あるものの霊性

明治以前の日本では、牛は役畜であって食用ではなかった。役畜は人間と労働を共有する仲間であった。「牛にひかれて善光寺参り」のように、霊的な働きをも共有する生命であった。明治に入って西欧文明が入ってくるとともに、栄養学という物質的客観化が食肉素材としての肉牛飼育を商品経済の中に定着させた。また、産業革命の原動力としての蒸気機関が導入されて、エンジンで動く耕運機が普及するにつれて、役畜という労働力の需要はなくなった。

スチームタービンを駆動する蒸気発生器は発電システムの主役でもあった。第2次世界大戦以降、核エネルギーが民生用発電システムにも応用されて、原発が実用化された。そして、8年前に福島第一原子力発電所で原子炉と呼ばれる蒸気発生器がメルtdownし、大量の放射能を帯びた核分裂生成物が地域一帯に放出された。汚染された牧草を食べた牛たちが激しい内部被ばくのために次々と発病し命を縮めた。結果として、もはや食用肉を提供する牛ではなくなった。

しかし、牛たちが持っている生命体としての霊性が消えたわけではない。牛たちの体内を流れる赤い血が霊肉両面を備えた生命力として体内を駆け巡っている。その働きに目をつむって「屠殺」することは自然の摂理を無視することではないか。人間の都合だけでは語れない自然の摂理があるのではないか。

⁴ 「サーベル」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%99%E3%83%AB>

3. アニマル化した人間

農水省は、被ばくした牛たちをすべて殺処分することを指示した。それは。酪農家たちにとって家族を殺すに似たストレスを強いた。現場にいない官庁の人びとには、牛たちの体内を流れる熱い血潮と躍動する肉体が意識にのぼらないようだ。紙の上に「タンパク質 XX キログラム、ビタミン YY グラム、鉄分 ZZ グラムと表現されて、解体された食材としての肉塊だけが視野にあるようだ。3次元空間を躍動する生命体は透明化されて、2次元の会計帳簿のうえで「食材・総額：いくら」というデータだけが記入されているのではないか。それは、エコノミック・アニマルのデータ処理の1群に転換される。みずから感性を打ち捨てて物神崇拜に生きる人々には、生きている牛も帳簿上のデータと認識されるに過ぎない。

このような人々が牛たちを見下す視線は、そこで生活を共にする住民たちへの同情も欠落させてしまっているに違いない。未曾有の放射線被ばくにさらされて多数の子供たちが甲状腺がん罹患し、若い親たちが他県に避難している現状に対して、政府は高線量地域に早く帰還せよと誘導している。その上、同様の原発事故リスクを無視して、経済効率のために既存原発の再稼働を急いでいる。

生命を全うしようと苦闘する病める牛たちも、それをサポートする牛飼いたちの奮闘も、エコノミック・アニマルたちの視野を覆うとばりを破り捨てて、覚醒にいざなう導きの星になってほしい。

(2019年1月4日 哲)